IS　～覇を吐く益荒男～

ossann

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ　～覇を吐く益荒男～

【Ｎコード】

Ｎ５７０７Ｚ

【作者名】

ｏｓｓａｎｎ

【あらすじ】

過去の記憶を失ってしまった一人の少年、織斑春十（オリムラ ハルト）。自分を家族として迎え入れてくれた一夏と千冬を己が光とし前へと進む物語。

プロローグ（前書き）

これは息抜きに書いた小説です、メインはもう一つの方なのですが
こっちもかなりやりたかったネタなのでひとまずさらしておきます。

主人公の主だった説明は次回にでも……

プロローグ

生きたい、ずっとそれだけを願ってきた。正確には成したいことがある、だから死ねない、故に生きたい。と言った方が正しいだろう。生きたかっただから[redacted]される前に[redacted]した。生きたかっただから強くなった。行きたかったから辛いことにも耐え抜いた。生きたかった、守りたい人がいたから。だけどその人はもういない、どこに行ったのかも覚えていない。もしかしたら思い出したくないだけなのかもしれない。

その人が居なくなって俺は死にたくなった、だけど誰も俺を[redacted]してくれなかった、自分を[redacted]勇気もなかった。

そんな時俺は彼と彼女にであった、おれの兄と姉になってくれた存在。俺の家族となってくれた存在。俺の光になってくれた存在。

暗闇の中で膝抱えて自分が死ぬまでガタガタ震えていた俺に手を差し伸べてくれた存在、眩しすぎて、導いてほしくて、俺はその光と一緒に前へ進もうと思った。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「おい、春十（はると）起きろよ。もうすぐ降りる駅に到着するぞ」

「んあ？」

なんだか夢を見ていた気がするんだが、あれ？

「おい、この後試験だってのに大丈夫か？」

「ん～、ふぅ。問題ねぇよ一夏。少し緩んでただけだよ」

「ならいいんだけどさ」

まあ、思い出せない夢は忘れるに限るな。さてこの俺様こと織斑春十、んでこっちの俺を起こしてくれたイケメン兄貴の織斑一夏はこれから藍越学園の入試試験へと行く途中であるというわけだ。まあ試験会場へ行く間に寝るとは、千冬姉にばれたりしたら「たるみ過ぎだ、馬鹿者」とお叱りを受けてしまうな。

さてここで重大発表、俺様、織斑春十と織斑一夏、織斑千冬は血のつながった兄弟ではないのだ、三年前の事件が……

「おい春十。駅に着いたぞ？　いつまでボーっとしてるんだ？」

「いまいい所なんだから邪魔するなよ、せっかく俺の生い立ちを語るナイスな展開だったのに」

「電波でも受信したのか？　さすがに引くぞ？」

「……おっしゃる通りでございます」

・・・

・

さて、試験会場に付いたわけなんですが……

「「迷った……」」

ああ迷った、けどこれは俺たちのせいでは決してない、この「俺が考えたかっこいい建物」のせいに決まってる。迷路と言っても過言ではない道筋、なのに案内板の一つもありはしない。一面ガラス張りの廊下はなんなんだ直射日光ガンガン当たるじゃねーか。あの意味なく壁に貼られたタイルは何を主張したいのだ？　埋め込み式の照明、なんかカッコいいじゃねぇかコンチクショウ。
一夏の兄貴もなんか似たようなこと考えてるっぽいしな～、てことはだ……

「「よし、次に見つけたドアを開けよう。それで大体正解だ」」

やっぱり、お互い血がつながっているわけじゃないけどこういう所は似ているんだよな。
お互い苦笑しあい、近くにあったドアに入ることに。

「あぁ、君たち受験生だよね。向こうに着替えあるから。時間押してるから急いでね、四時までしか使えないんだから。全くやりにくいったら……」

うむ、神経質そうだがそこがいい！　と思えるなかなかの美人だっ

た。知的クール、そしてポニテ、ｇＪです！

「おい春十、バカなこと考えてないでさっさと行くぞ？　しっかしなんで着替える必要があるんだよ」

「こっちの考え読むなっつーの。まああれだろカンニング対策の一環じゃね？　面倒だしさっさと終わらせようぜ？」

「俺より成績いいくせに面倒ってなんだよ。いや成績いいから面倒なのか」

「なはは、わりぃな」

まあこんなチャランポランな奴が成績いいってのも変な話だよな？
まあ人一倍物覚えがいいだけなんだが……なんでだろうな？

「はぁ。んじゃ俺はこっちの更衣室使うからな」

「ん、了解っと」

ひとまず着替えようとして更衣室？　と思われる部屋のカーテンを開けるとそこには甲冑が跪いていた。よく見れば細部は甲冑ではないと言われそうだが面倒なので甲冑と呼んでおくが……

「こいつは……」

一応俺も知識としてはこいつを知っている。
『ＩＳ』、正式名称『インフィニット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定されたマルチフォーム・スーツ。『製作者』の意図に反し宇宙進出が一向に進まず、スペックの高さから『兵器』として

扱われ、そして各国の思惑から『スポーツ』に大幅なランクダウンした……所謂、飛行パワードスーツだ。

「やれやれ、女しか扱えないモンがどうしてこんなとこにあるんだよ？」

俺はつい反射的ににこの場に不釣り合いなパワードスーツを叩いていた。

キン！！

「な！？」

いきなり頭に響いた金属音。そして頭に直接入ってくるおびただしい情報……

知らないはずなのに、今まで知らなかったはずなのに、なんで懐かしいと感じる？　それだけじゃない憎いとも……いやＩＳじゃなく―ＩＳの向こうにある何か（・・・・・・・・・・・・）に俺は深い憎しみを抱いていた。

「待てよ俺。何も分からない存在に怒りぶつけてどうするんだよ」

嫌な感情を頭から追い出し、カーテンをくぐって外に出るとそこには、俺と同じく『ＩＳ』を身にまとった一夏がいた。

「「お前もかよ……」」

この時俺は直感した、面倒事に巻き込まれた……と。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5707z/

IS　～覇を吐く益荒男～

2011年12月19日00時52分発行